

中古文学会関西部会第 53 回例会 発表要旨

1. 『源氏物語』における琵琶を弾く女君の造型と漢文学 —明石の御方を中心に—

立命館大学（院） 劉 安琪 氏

〔要旨〕『源氏物語』において、明石の御方は、琵琶の名手として繰り返し描かれる。そのことは彼女の造型とどう関わっているのか。そこで、琵琶と結びついて地方に流離する女性の代表格である王昭君や烏孫公主に関する逸話を取り上げ、明石の御方の造型を考察していきたい。特に『文選』『琴操』などに基づき、明石の御方の出自や婚姻の選択などの描写を検討する。本発表は王昭君と烏孫公主の双方を、『源氏物語』が重層的に踏まえ、明石の御方の造型を築き上げたという結論に至る。

2. 『和漢朗詠集』古注釈をめぐって

京都大学（院） 宮武 衛 氏

〔要旨〕『和漢朗詠集』所収の漢詩句は、その漢詩句の出典（原詩）の文脈から切り離されることによって、必ずしも原詩の文脈の通りに、原詩の文脈に沿うようには解釈されない。それは、『和漢朗詠集』の古注釈においても同様であった。本発表では、原詩と古注釈とにおける「ずれ」をいくつか掲げ、そのような「ずれ」が生じた原因について考察する。あわせて、そのような古注釈を検討する意義についても考えてみる。

3. 『大和物語』の「となむありける」—〈歌物語〉の生成—

山下 太郎 氏

〔要旨〕『大和物語』の初段と最終段（173段）は、ともに歌を受ける「となむありける」で終結する。出来事を提示するだけなら、これらの「となむありける」は必要がない。しかし、『大和』には、歌を受ける「となむありける」が20例、他に「とありけり」（18例）、「とあり」（4例）もある。『伊勢物語』には「とあり」が1例あるのみである。「となむありける」などの歌を受ける表現の使用が、『大和物語』を特徴付けるものであることは明らかである。それほどのような機能をもつのか。「となむありける」によって歌の存在を確認することは、『大和物語』の〈歌物語〉の生成に関わるのではないか。